

10月総評 西躰かずよし

今月は日常の一コマを切り取った作品に惹かれた。短いということは多くを語れないので、ワンシーンで背景やものがたりまでも成立させてしまうという方法は有効だと思う。いつも思うのは、その短い言葉が、ひとつの世界をかたちづくる不思議さである。書くことはそうした不思議さを生み出す亀裂のようなものに向き合うことなのかもしれない。

るんたった るんたった

マスカット 買ってくる

おんぷ (東京都)

促音の繰り返しの効果もあるだろう。マスカットを買うという何気ない行為が、今にもスキップしたくなるような楽しさに変わる。

誰も見ていないアニメが流れてる

必殺技で人が死んでる

いろは (京都府)

必殺技で悪人を倒すというセオリーが、作者によって無関心な中で行われる殺人として捕らえ直される。「人が死んでいる」と表現したのは、必殺技ならば殺してもいいという発想に対する明確な否定と読める。

まどのすきまから

とうめいのへびみたいに

かぜがするする

はいつてきたよ

春町 美月 (大阪府)

風がはいつてきたという、ただそれだけのことに惹かれるのは、作者の感じたリアルが、読み手の生の実感にまでつながるからなのだと思う。

雨の日はいつも右の腕だけ濡れる

笹生あい (東京都)

右の腕だけ濡れるのに理由はないだろう。理由がないまま、いつも右の腕だけ濡れてしまうというその点にこそ作者のいいたいことはあるだろう。濡れる冷たさにもまた理由がないように。

行く春に食器重なる音一つ

長谷川柊香 (宮城県)

行く春と食器の重なる音が組み合わさることで産まれる静謐な時間。

毎朝

駅の線路へと

惹かれる

みたらし（京都府）

惹かれるのは駅でも電車でもなく、どこまでも続く線路である。毎朝惹かれるのは、旅情の故なのだろうか、それとも、そこにどこまでもつづく永遠への憧れが含まれているからなのだろうか。

流れ星ひとつは僕によく似てる

細村 星一郎（東京都）

通常、流れ星は見つけるもので、不意に現われるものでしかない。けれども作者には無数の流れ星が見えているのだろう。そのひとつと自身を重ねることで、無数の流れ星は落ちることを宿命づけられたわたしたちの存在と重なりあうようにも見える。